

耳鼻科領域感染症に対する各種新抗生剤の比較検討

坂本 裕 • 松川 純一
本村 美雄 • 新川 敦*

過去約3カ年間に川崎市立川崎病院耳鼻科において治験を行った新しい抗生剤のうち代表的な経口剤5種を選んでその治療成績の比較検討を行った。抗生物質はPC系, CE系, MC系など多くの系統に分類されるが, これらのうち耳鼻科領域の感染症に多く用いられる合成ペニシリン系のPV-PC, セファロスポリンC系のCEX, マクロライド系のMDM, その他として分類されるFOM, およびサルファ剤の代表としてSMX-TMP合剤であるSTの5種である。見方を変えればST合剤は過去において多く用いられた製剤の代表, MDM, PV-PC, CEXは現在最も愛用されている製剤の代表, そしてFOMは将来これを核として色々な誘導体が形成されて行く可能性も認められ, 明日の抗生剤の代表として考えることも出来よう。

治療の対象とした疾患は急性中耳炎57例, 急性扁桃炎30例, 外耳炎13例を始め耳鼻科領域の一般感染症であり, すべて外来で治療を行った。また投与量は原則として常用量である。症例はST合剤37例, MDM33例, PV-PC25例, CEX16例, FOM36例で総計147例の小児および成人である。

効果判定基準として, 著効: 4日以内に主要症状が消失したもの, 有効: 7日以内にほぼ軽快したもの, やや有効: 7日の時点で治癒傾向を示すが, なお追加治療を要するもの, 無効: 7日の時点でほとんど治癒傾向を示さないもの, の4段階とした。

次に各薬剤別の治療成績を示す。まずST合剤については(剤型:錠およびシロップ), 急性中耳炎23例中著効2例, 有効15例, やや有効0, 無効5, 判定不能1, 有効率77.3%を示したのを始め, 慢性中耳炎急性増悪9例, 外耳炎3例, 頬部蜂窩織炎2例, その他3例の計40例中著効2, 有効25, 無効10, 判定不能3で有効率73.0%であった。

次にMDM(カプセル)では, 急性中耳炎11, 急性扁桃炎2, 外耳炎7, 慢性中耳炎急性増悪6, 急性咽喉頭炎4, 急性副鼻腔炎1, その他2の33例において,

著効1, 有効26, 無効5, 判定不能1で有効率84.4%を示した。

PV-PC(カプセル)では急性中耳炎3, 慢性中耳炎急性増悪3, 急性扁桃炎13, 急性咽喉頭炎5, 急性顎下腺炎1の25例に対し, 著効4, 有効14, やや有効2, 無効3, 判定不能2で有効率78.3%であった。

CEX(カプセル)では急性中耳炎5, 急性扁桃炎6, 外耳炎2, その他3の16例について, 著効6, 有効9, やや有効1, 無効0で, 有効率93.8%を挙げた。

FOM(カプセル, ドライシロップ)では, 急性中耳炎15, 急性扁桃炎9, 急性耳下腺炎3, 急性咽喉頭炎3, 急性副鼻腔炎3, その他3の36例において, 著効12, 有効17, やや有効3, 無効4で有効率80.6%であった。

表1 薬剤別著効率および有効率

薬剤	著効	著効率	有効	有効率
ST	2/37	5.4%	27/37	73.0%
MDM	1/32	3.1	27/32	84.4
PV-PC	4/23	17.4	18/23	78.3
CEX	6/16	37.5	15/16	93.8
FOM	12/36	33.3	29/36	80.6

これらの結果をまとめたものが表1である。すなわちこれら5つの薬剤は有効率について見る限りはSTの73.0%からCEXの93.8%まで有意の差はないといえるが, 著効率について見るとMDMの3.1%からCEXの37.5%までと大きな差を認める。これはST, MDMのごとき静菌的薬剤とPV-PC, CEX, FOMの殺菌的薬剤との差が現われて来ているとも考えられる。

次に副作用について見ると, 表2に示す通りであるが, PV-PC, 次いでFOMがかなりの頻度に副作用を示していることが分かる。多くは胃部不快感など比

* 川崎市立川崎病院耳鼻咽喉科

表2 副作用

薬 剤	症 例 数	発 疹	下 痢	胃不 快感 部感	そ の 他	総 計	発 現 率 [‰]
S T	40	1	0	1	1	3	7.5
MDM	33	0	0	1	0	1	3.0
P V - P C	25	2	0	5	0	7	28.0
C E X	16	0	0	0	0	0	0
F O M	36	0	1	5	0	6	16.7

較的軽度のものであるが、一部発疹など投薬の中止を要するものもあつた。いずれも投薬を中止すれば症状は消褪した。血液・尿・腎・肝機能などについては検査を施行し得た範囲においては異常を認めなかつた。

以上耳鼻科領域の一般臨床においてしばしば見られる比較的軽度の感染症に対して、代表的な新しい抗生剤5種をえらんで臨床治験を行い、その効果などについて比較検討した。これらの治験は約3カ年の間に、それぞれ約3カ月程断続的に施行されたものをまとめたものであり、この間担当医の交代などもあり、必ずしも統一された意志の下に行われたとはいひ難い。また剤型の差などによつて対象とする疾患、年齢層などにもかなりのばらつきがあり、投与量、投与日数も一応常用量、7日間を原則としているが、それ以外のももかなり含まれている。

このように多くの因子が関与しているため、この結果を単純に受けとることは困難ではあるが、一応の結果

論を出すとするれば、(1) minor infection である耳鼻科領域の感染症に対しては、どのような程度の抗生剤であつてもあまり有効率に差はない。(2)しかし素早い効果(著効)を期待する場合やはり bacteriostatic な薬剤よりは bacteriocidal なものの方がより速効性が期待できるといえる。(3)有効率、著効率の高さ、そして副作用の少なさなどの面から見て、現在用いられている抗生剤の中では CEX はいわゆる first choice として最も適した薬剤の1つである—などのことが挙げられよう。

〔質問〕馬場(名市大): Fosfomycin は殺菌的な作用をもつ物質であるが、臨床的に使用してみると、やや手ごたえが甘い感じがしているがいかかか。

〔応答〕坂本(市立川崎): FOM は起炎菌に対する感受性などからみて上気道感染症に対してスペクトルムのずれを感じずることは事実であるが、統計上からはかなり高い著効率を得ている。

〔質問〕三辺(関東通信): PVPC の副作用は胃腸障害が多いとのことだが、どの程度の副作用か。

〔応答〕胃部不快感程度の比較的軽度のものであつた。

〔追加〕岩沢(札幌通信): PVPC の副作用の問題は胃腸障害が多いとのことだが、肝障害も重要な副作用のひとつのようである。

慢性上顎洞炎に対する抗生剤使用の検討

金子 豊 • 湯 浅 涼
河原田 和 夫 • 河 本 和 友*

慢性副鼻腔炎の病態を把握して、治療をおこなう場合、その起炎菌を決定することは大切なことである。しかしながらその試料の採取、鼻腔・副鼻腔における常在菌の存在、また慢性化された洞内炎症の症状を示す indicator の少ないことなどが、実際には起炎菌決定を困難にしている。

従来から報告されている副鼻腔炎の洞内菌の検出成績をみると、鈴木¹⁾は1971年好気性菌47.9%、嫌気性菌5.3%、菌陰性46.8%と報告している。培養された菌種をみると、連鎖状球菌、葡萄状球菌などが多く緑膿菌は1~2%検出されているにすぎない。前山²⁾、長谷川³⁾その他数多くの発表があり、上

* 東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室